

知的障害者のスポーツニーズと課題の検討（２）

－スペシャルオリンピックス参加者の意識調査と５年前との比較－

Consideration of Sports Needs and Issues of Persons with Intellectual Disabilities（２）

田 引 俊 和

要旨

本研究の目的は、知的障害者の生涯スポーツの普及・振興に向けて、そのニーズや課題を明らかにすることにある。とくに教育現場以外で継続的に実施されているスポーツ実践に着目し、分析を行う。

量的調査で得られた自由記述コメントを分類した結果、スポーツの機会そのものに対するニーズがあることがあらためて示され、また、５年前調査との比較ではよりスポーツらしさを求めていることが明らかとなった。支援者、関係者はこのことを意識していく必要がある。

キーワード：障害者スポーツ（disability sports）／知的障害（intellectual disabilities）／
スペシャルオリンピックス（Special Olympics）

１．はじめに

わが国の障害者スポーツ^{注1)}はおもに身体障害者を対象としたものがやや先行して展開しており、知的障害者のものは約20年の遅れがある（渡邊, 2006, p.136）とされている。要因の一つに家族等の意識が関係していることが推察され、具体的に「家族や関係者に、知的障害者はスポーツできない、余分であるという先入観がある（能村, 1998, p.149）」、あるいは、「家族や関係者にさえ、スポーツは無理である、不必要と言うスポーツに対する評価があり、可能性や必要性が十分理解されなかった（矢部・佐藤, 1995, p.1264）」といった言説もある。知的障害者スポーツの発展過程に関する重要な指摘であり、今後普及・振興を推進していくうえで理解しておくべき一側面だといえる。

一方、近年ではスポーツ基本法の成立・施行（2011）、スポーツ庁の発足（2015）、スポーツ基本計画の整備（2012, 2017）など、社会全体でスポーツの機運は高まってきているが、その中で知

的障害者スポーツに対して障害当事者、あるいは家族等はどのような意識を持っているのか検証したものは多くはみられない。本研究ではそのニーズや課題を明らかにすることを目的に量的調査・分析を行う。教育現場や福祉施設以外で、かつ、イベント的なものでない継続的な知的障害者スポーツを対象とする。

２．調査の設計

２．１ 調査対象（１）

本研究は、知的障害者の日常的なスポーツや全国レベルの大会などを支援している知的障害者スポーツ組織「スペシャルオリンピックス^{注2)}」を対象に、その会員である知的障害者のスポーツ参加実態、同組織でのスポーツ実践に対するニーズ、課題について検討を行う。

同組織に所属する知的障害がある当事者会員は、自主的、継続的参加が主であり、そのスポーツへの意識は学校教育や社会福祉施設等での諸活動の一部、あるいは単発・イベント的なものと比べて高いことが想定される。したがって限られた層に限定した調査研究ではあるものの、得られた結果は今後の知的障害者スポーツのあり方を検討する

TABIKI, Toshikazu

北陸学院大学 人間総合学部 社会学科
障害者福祉論・障害者スポーツ

際に用いることができるものとする。

2. 2 調査対象(2)「保護者という伴走者」

本研究では知的障害者スポーツの発展は、当事者のスポーツに対するニーズの発展を主軸になされるという観点に立ち、その内容の検討を主たる課題としている。しかし、知的障害という障害特性により量的調査に必須な質問紙法を直接当事者に採用することは難しいため、「保護者という伴走者^{注3)}」に対する調査分析から、「保護者からみた当事者意識」としてそのニーズや課題を推定して検討することとする。また、知的障害がある会員を対象とするが障害程度に関わらずスポーツに対するニーズを有し、参加できるという視点から、療育手帳^{注4)}の有無や等級などは問わずに検討している。

2. 3 調査方法

本研究では質問紙を用いた量的調査を行なった。調査票は、同組織における知的障害者会員のスポーツ実践を問う旨を示した上で、保護者や活動を支えるボランティアスタッフ等も含め同じ内容で構成し、47都道府県にある地区組織のうち任意に選んだ複数地区を対象に2009年と2014年に郵送法を中心に実施した^{注5)}。

2009年の調査は、配布(2087)、回収(876、回収率42.0%)で、その内の保護者からの回答491件をここでの分析対象とした。スペシャルオリンピックスの2009年の知的障害当事者の会員数は全国で7816人(スペシャルオリンピックス日本)で、この年の在宅知的障害児・者は54.7万人で、同組織の知的障害当事者の全国の会員数7,816人はこれの1.43%となっている(内閣府, 2009)。

2014年調査では、配布(687)・回収(339、回収率49.3%)で、そのうち保護者という伴走者からの回答237件を抽出してここでの分析対象とした。スペシャルオリンピックスの2014年の知的障害当事者の会員数は全国で7790人(スペシャルオリンピックス日本)となっており、2014年の在宅知的障害児・者は62.2万人で、同組織の知的障害当事者の全国の会員数7790人はこれの1.25%となっている(内閣府, 2014)。

なお、本研究の主テーマとは別の視点にはなる

が知的障害がある当事者会員数は2009年と2014年ではほぼ同数であり、5年間で増加拡大しているとはいえない。

2. 4 調査内容と分析方法

調査内容は、基本属性と知的障害者スポーツの効果・影響に関する質問項目、自由記述コメント欄の3群で構成した。このうち本稿では自由記述コメントについて報告する。調査においては回収率を高めるために基本属性の項目は最小限とした。

基本属性については、トレーニングの4大条件(魚住, 2004, p.61)として示されている負荷、時間、期間、頻度のうち、当事者あるいは伴走者である保護者の意識で決定できる活動期間(年数または月数)と頻度を設定した。この外的条件の充足度を左右するものとして当事者や保護者の生活環境があるが、本研究ではスポーツに対するニーズや課題の内容検討を主とするために割愛している。

自由記述コメント欄については、現場の経験を活用し問題を探るKJ法(川喜田, 1967, 1970)を用いて分析を行った。分析作業は、①得られた自由記述コメントについて精読し、②記載されている言葉や前後の文脈を検討して意味単位ごとの分析データ文に分け、③類似の意味内容を持つデータ文を集約し、④サブカテゴリー(表札)を設けるとともに代表的なコメントをいくつか示し、⑤さらにこれをもとに抽象度のより高い上位カテゴリー(表札)を作成した。⑥作業の過程で、地域や個人名、活動場面などが特定される恐れのある記載については匿名化した。今回は社会福祉学を基盤とする筆者が分類作業を行なった。

2009年調査分の詳細については既に報告済み(田引, 2018)のため、ここでは2014年に行った調査を中心に分析・考察し、二つの比較においてのみ2009年の調査結果を用いることとする。

2. 5 倫理的配慮

調査票配布にあたっては、事前に当該知的障害者スポーツ組織の責任者に調査用紙を示し趣旨説明とともに確認と同意を得た。また、調査票はすべて無記名回答用紙を用いた他、回答は任意であり結果は研究目的にのみ使用され、かつ、統計

的に処理を行い回答者が特定されない旨を調査票上に記した。

3. 結果

3.1 回答者の基本属性・参加状況

2014年調査で回答が得られた237件のうち当該知的障害者スポーツ組織での参加頻度^{注6)}は表1のとおりであった。月に1回～2回、週に1回を合わせると77.3%で、多くの会員が週に1回から月に数回程度という参加状況であった。また、その期間については回答者による具体的な数値の記入から最小値0、最長13年、平均6.03±3.21年という結果が得られた。さらに、期間を平均±1/2 SD法により分類したところ、短期（73件、構成比30.8%）、中期（81件、同34.2%）、長期（83件、同35.0%）となった（表1）。

表1：スポーツ参加状況

参加頻度	件数	構成比
参加していない	12人	5.1%
年に数回ぐらい	32	13.5
月に1～2回	153	64.6
週に1回	30	12.7
週に2～3回	7	3.0
週に4日以上	1	0.4
期間（年）		
短期(2.81年以下)	73	30.8
中期(2.82～9.24年)	81	34.2
長期(9.25年以上)	83	35.0

3.2 自由記述コメントの分析

2014年調査の自由記述コメント（237件中114件で記載）をKJ法により分類した結果、「スポーツ実践への評価・感謝」「実践上の提案・課題」「スポーツ環境」という3つの上位カテゴリーが生成された（表2）。詳細を以下に示す。

まず上位カテゴリー「スポーツ実践への評価・感謝」では、サブカテゴリーの「具体的な効果・期待」に最も多くのコメントがみられる。例えば、「参加して、運動の楽しさと、運動が出来る事を知った」「土、日曜日の余暇活動としてとても有意義」といった回答を得ている。知的障害の特性に合ったスポーツ参加が十分でないことや、体力

面や競技面だけでなくQOL向上などの期待が示されている。また、活動を支えるスタッフ等に対しては、「毎週来てくれるボランティアの方には感謝」「指導者のかたの熱心さに頭が下がる」など多くの謝意を示すコメントがみられ「支援スタッフ等に対する感謝」サブカテゴリーを構成している。

関連して、サブカテゴリーの「スポーツの機会に対する感謝」にも多くのコメントがあった。例えば、「子供が高等部を卒業後運動に出会えるとは思っていなかった」「高等部卒業後に集団でスポーツが出来ると最高」「親として障害の有る子ども達が活動出来る場がある事はとってもうれしい事と思う」など、知的障害者の社会生活上、とくに特別支援学校等の卒業後のスポーツ参加の機会に対する記載が多くみられる。卒業後にスポーツの機会が十分でないことはこれまでも指摘されており（後藤，1992，p.44，；奥田，2007，p.162），今回の調査でもこれらを支持する結果が得られたといえる。

次に、「実践上の提案・要望」カテゴリーでは活動内容に対する提案，要望などのサブカテゴリーを生成している。そのうちサブカテゴリー「活動・指導内容の充実化」では多くのコメントがあり，大きな特徴が表れている。具体的には，「もっと専門のコーチから指導してほしい」「障害者の運動はこの程度で十分という考えが見受けられる」「障害をもっているからとゆるい活動ではなく，スポーツマンとしてスポーツをするグループとして活動を望んでいる」というようなものである。

また，これとは対照的に，「個々のレベルに応じてプログラムを組んでほしい」「重度知的障害者には難しい部分がある」「ルールが理解できないと参加してはいけないのでしょうか？」といった障害特性に対応した活動を求める回答もみられる。保護者からみた当事者意識として，知的障害があったとしてもスポーツらしい活動，指導内容の充実化を期待していることが示されている。

この他，「ボランティアの方が不足」「全体的にコーチ，ボランティアの人数が少ない」など活動を支援するスタッフ不足への言及があり「スタッフ等の数的充実」サブカテゴリーを生成している。

表2：自由記述コメントの分類 (2014年調査)

上位カテゴリー	サブカテゴリー	代表的なコメント例 (サブカテゴリー内の類似コメント数)
スポーツ実践への 評価・感謝	具体的な 効果・期待	<ul style="list-style-type: none"> ・参加して、運動の楽しさと、運動が出来る事を知った。 ・障害のある、なしに関係なく同じスポーツを一緒に楽しむ中でたくさん感動と喜びが持てる素晴らしい活動だと実感。 ・土、日曜日の余暇活動としてとても有意義。 ・障害児・者の社会性育成、体力向上、余暇の充実に大変良いと思う。(34)
	支援スタッフ等に対する感謝	<ul style="list-style-type: none"> ・毎週来てくれるボランティアの方には感謝。 ・指導者のかたの熱心さに頭が下がる。(22)
	スポーツ機会に対する感謝	<ul style="list-style-type: none"> ・子供が高等部を卒業後運動に出会えるとは思っていなかった。 ・高等部卒業後に集団でスポーツが出来ると最高。 ・親として障害の有る子ども達が活動出来る場がある事はとってもうれしい事と思う。(21)
	積極的な関与	<ul style="list-style-type: none"> ・保護者として、できることは協力させていただきたいと思う。 ・これからも続けられるかぎりがんばりたいと思う。 ・長く続くことを願う。家族皆で応援している。(13)
実践上の 提案・課題	活動・指導内容の 充実化	<ul style="list-style-type: none"> ・もっと専門のコーチから指導してほしい。 ・障害者の運動はこの程度で十分という考えが見受けられる。 ・障害をもっているからとゆるい活動ではなく、スポーツマンとして、スポーツをするグループとして活動を望んでいる。(29)
		<ul style="list-style-type: none"> ・個々のレベルに応じてプログラムを組んでほしい。 ・コーチや体制によって重度知的障害者には難しい場面がある。 ・ルールが理解できないとスポーツに参加してはいけないのでしょうか？(10)
	支援スタッフの 数的充実	<ul style="list-style-type: none"> ・ボランティアの方が不足。 ・全体的にコーチ、ボランティアの人数が少ない。 ・有償でのコーチ依頼もありかと思える。(14)
	組織運営	<ul style="list-style-type: none"> ・ルールが厳格、理事会等も含めもう少しゆるやかな活動でも良いと思う。 ・全国大会、世界大会への参加枠がもう少し増えればと考える。(4)
スポーツ環境	移動・送迎	<ul style="list-style-type: none"> ・本人を連れていきたいが、自分の休みと合わず欠席となってしまう。 ・移動手段が何かあればいいと思う。 ・いつまで連れていってあげられるか、と思っている。(17)
	広報・周知	<ul style="list-style-type: none"> ・保護者の理解が深ければ参加者が増える活動だと思う。 ・この場を必要としている一人でも多くの皆さんに広めたい。 ・素晴らしい活動なのに認知度がとても低いと思う。 ・まとまった資金を提供してくれるオフィシャルスポンサーがほしい。(19)
	役割分担	<ul style="list-style-type: none"> ・親の負担(役員や委員)があり、なかなか大変な時もある。 ・保護者の役割分担が、時々、負担になることがある。(10)
	年齢等	<ul style="list-style-type: none"> ・本人も親も年齢が高くなり、最近ほとんど参加していない。 ・本人は元気だが親は80代になり、つきあっていくのが大変。(8)
その他	その他	<ul style="list-style-type: none"> ・このアンケートのようなエビデンスに基づく評価があるとよい。 ・返信遅くなり申し訳ありません。(5)

前述のとおり、スポーツの機会に対しては率直に謝意を感じてはいるものの、運営のほとんどをスポーツボランティア^{注7)}に頼らざるをえない障害者スポーツ組織の現実的な課題がみられる。さらに、「有償でのコーチ依頼もありかと考える」というコメントは、活動の充実化とスタッフ不足に対する象徴的な意識だといえる。

3つ目の上位カテゴリーとして「スポーツ環境」を生成し、知的障害者が行うスポーツに特徴的な結果を得ている。構成するサブカテゴリー「移動・送迎」では、「本人を連れていきたいが、自分の休みと合わず欠席となってしまう」「移動手段が何かあればいいと思う」などスポーツ会場までの移動や送迎に関するコメントが多くみられる。先行研究でも保護者の付き添いが不要な参加を望んでいることが報告されており（守田・七木田，2004，p.74），当事者だけでの移動等に制約がある知的障害者ならではのニーズ・課題だといえる。同様に、保護者の役割、委員会の担当など障害者スポーツ組織の運営に関する負担感のコメントもあり、これらも当事者だけで完結しにくい知的障害者特有のニーズ、課題だといえる。

「広報・周知」サブカテゴリーでは、「保護者の理解が深ければ参加者が増加する活動だと思う」「この場を必要としている一人でも多くの皆さんに広めたい」「素晴らしい活動なのに認知度がとても低いと思う」などがみられた。ただ、今回はスポーツ、あるいは障害者スポーツとメディア、社会関係（阿部，2008；藤田，2002，pp.197-217；渡，2010，pp.230-251）などを意識したものではない。プロ化や商業化への言及も一切なく、概して知的障害者スポーツを広く知ってほしいという保護者の率直な意識が表れている。

3. 3 2009年と2014年の自由コメント比較

ここまでは2014年の調査で得られた自由記述コメントに対する類型化を行ってきた。本節ではその結果と、5年前の2009年に同じ知的障害者スポーツ組織を対象に行った調査結果との比較検討を行う。2回の調査では同等のカテゴリーが生成されたが、その内訳で大きく変化した部分と、特に変化がなかった部分がみられた。2009年の分析結果に関しては2.4節で述べたとおり既に報告

済みのためここでは結果のみを示す（表3）。配布・回収数が異なるためコメント数での比較ではなく、全体に対する構成比により検討を行なった（表4）。

まず、特徴的な結果が2つのサブカテゴリーで示されている。2009年の調査結果では、「組織運営」に対するサブカテゴリーに多くの意見があり（全体コメントの17.5%），その内訳の多くは、全国大会に出られるようにしてほしい、失格のルールを変更してほしいというような個人レベルの要望・提案がほとんどであった。逆に、活動内容の充実化やスポーツらしさを求めるコメントは少なかった（同，2.0%）。

これとは対照的に2014年の結果では、大会参加やルール変更といった個人レベルの要望・提案は減少し（同，1.9%），逆にスポーツらしさを求めるコメントが大きく増加している（同，14.1%）。同組織のスポーツに参加する当事者意識は、5年前とは異なるものであるといえる。障害の程度に関わらずその特性に合わせたスポーツ（アダプテッド・スポーツ^{注8)}）を求めるコメントは2009年と2014年のどちらの調査でも同程度示されている（表4）。

この他のサブカテゴリーでは特に変化はなく、サブカテゴリーの「スポーツ効果・期待」「スポーツ機会への感謝」「支援スタッフへの感謝」などには共通して多くのコメントがあり、知的障害者スポーツの意義と潜在的なニーズがあることが確認できる。また、「移動・送迎」「役割分担」などもどちらの調査でもニーズが表れており、知的障害者のスポーツ実施が当事者だけでは充足し難い側面を持っていることを明確に示している。

4. 考察

本研究では知的障害者スポーツ組織「スペシャルオリンピックス」に参加している知的障害者の活動実態、スポーツに対するニーズの内容、課題を明らかにするために、保護者という伴走者を対象に質問紙を用いた量的調査、分析を行った。その結果を以下で検討する。

4. 1 継続的に長期間参加することの意義

今回対象とした障害者スポーツ組織で活動して

表3：自由記述コメント分類（2009年調査）

上位カテゴリー	サブカテゴリー	代表的なコメント例（サブカテゴリー内の類似コメント数）
スポーツ実践への 評価・感謝	具体的な 効果・期待	<ul style="list-style-type: none"> ・できないだろうと思っていたが、続けることの大切さを実感した。 ・先の見えないわが子の将来が、楽しく、明るいものになった。 ・本人たちの社会参加のよい機会となっている。 ・子供の精神面にも多大に影響を与えて頂けたことを喜んでいる。 ・知的障がい者が一般社会に知られるようになった。啓発活動に感謝。(43)
	支援スタッフ等 に対する感謝	<ul style="list-style-type: none"> ・コーチやボランティアの方々にはいつも頭が下がる。 ・協力していただいているボランティア、企業にはありがたいと思っている。 ・たくさんのスタッフ、ボランティア等に支えられスポーツができる楽しさを感じ、感謝の気持ちしかない。(27)
	スポーツ機会 に対する感謝	<ul style="list-style-type: none"> ・学校を卒業すると体を動かす機会はほとんどない。とっても必要な活動だと思っている。 ・スポーツの場を与えていただき、ありがたく思っている。 ・スポーツクラブ等何かさせたいと思っても健常な子供と一緒にちょっと無理だろうとなかなか一歩が踏み出せないで、この活動には気兼ねなく参加できる。(24)
	積極的な関与	<ul style="list-style-type: none"> ・楽しい活動になるよう、保護者として協力していきたいと思っている。 ・自分なりに（微力ですが）協力したいと思う。 ・まだ下の兄弟に手がかかるので今はあまりお手伝いができないが、いつかは何かお返しができればと思っている。(19)
実践上の 提案・課題	活動・指導内容の 充実化	<ul style="list-style-type: none"> ・スポーツ関係の資格を持ったボランティアの指導がほしい。 ・コーチ・指導者の技術不足を感じる。(6) ・どんなに重度でも参加できればいいと思う。 ・情緒・知的にコミュニケーションが取りにくい子のことへの配慮があれば、もっと参加したい人も多くいると思う。(12)
	支援スタッフの 数的充実	<ul style="list-style-type: none"> ・社会人の方で多忙のようではなかなか来ていただけない現状がある。 ・ボランティアの数が足りていないので、指導するのが難しいように思う。 ・学生さんのボランティアを求めたい。大学が近くにあるが、学生さんたちにはあまり知られていない。(21)
	組織運営	<ul style="list-style-type: none"> ・ルール（失格等の基準）の見直しをお願いしたい。本人たちはいつも全力で競技するが、その結果、失格は納得出来かねる。 ・同種目の活動場所を増やしてほしい。 ・全国大会には多くの参加者が出場できるよう検討願う。(52)
スポーツ環境	移動・送迎	<ul style="list-style-type: none"> ・親が健在でなければ本人の参加が大変難しい現状がある。 ・私（保護者）も今グループホームに入り活動に参加していません。送迎の時間等難しい面がある。 ・母親の私の体が不自由なため、子どもを活動に出す機会が減って残念なこともある。(19)
	広報・周知	<ul style="list-style-type: none"> ・パラリンピックの一部としか世間には見られていないような感じである。 ・もっと多くの人にこの活動を知ってほしい。 ・このような素晴らしい活動がもっともっといろいろなところで広がっていくことを願っている。(23)
	役割分担	<ul style="list-style-type: none"> ・親として負担は軽くないと思う。 ・他の障がい者を持つ親に話すと親の負担感ゆえに遠慮されることがある。 ・（保護者への）精神的な負担もある。他のスポーツのようにコーチ主導でプログラムが進められるといいと願っている。(29)
	年齢等	<ul style="list-style-type: none"> ・子どもの年齢があがると親も年をとり、その分活動への参加がだんだんしんどくなっているのは確か。 ・将来、親が年をとり高齢になった時は、活動に参加するのが困難なこともでてくると思う。(8)
その他	その他	<ul style="list-style-type: none"> ・今回のアンケートも、この活動にはとても大切なことだと思う。保護者の意見も、時々では書面等で聞くことも良いことと考える。(14)

※2009年調査の詳細な分析は、「知的障害者のスポーツニーズと課題の検討～スペシャルオリンピックス参加者の保護者を対象とした調査分析～」北陸学院大学・北陸学院大学短期大学部研究紀要、第10号、pp.73-78,2018.で報告済みである。

表4：2009年と2014年の自由記述コメント分類の比較

上位カテゴリー	サブカテゴリー	2009年の全体コメントに対する割合（件数）	2014年の全体コメントに対する割合（件数）
スポーツ実践への 評価・感謝	具体的な効果・期待	14.5% (43件)	16.5% (34件)
	支援スタッフ等に対する感謝	9.1 (27)	10.7 (22)
	スポーツ機会に対する感謝	8.1 (24)	10.2 (21)
	積極的な関与	6.4 (19)	6.3 (13)
実践上の 提案・課題	活動・指導内容の充実化 (スポーツらしさ)	2.0 (6)	14.1 (29)
	活動・指導内容の充実化 (アダプテッド)	4.0 (12)	4.9 (10)
	スタッフ等の数的充実	7.1 (21)	6.8 (14)
	組織運営	17.5 (52)	1.9 (4)
スポーツ環境	移動・送迎	6.4 (19)	8.3 (17)
	広報・周知	7.7 (23)	9.2 (19)
	役割分担	9.8 (29)	4.9 (10)
	年齢等	2.7 (8)	3.9 (8)
その他	その他	4.7 (14)	2.4 (5)
		全コメント数297件	206

いる知的障害者は8割近くが週に1回から月に数回の頻度でスポーツ活動に参加していた（3.1節）。文部科学省（2013）による国民を対象とした全国調査^{注9）}では、成人一般の週3回から月に1～3回のスポーツ実施率が65.8%に対して、障害者（成人）では27.1%となっており、本調査結果は国民一般に匹敵する参加頻度であった。あらためてスペシャルオリンピックスに参加している知的障害者は、スポーツの参加頻度でみると先進層といえる。

4.2 知的障害者のスポーツニーズ・課題

自由記述コメントの分類（3.2節）では、特徴的な結果が2点得られた。まず、2014年の調査結果ではサブカテゴリー「活動・指導内容の充実化」において「スポーツらしさ」と「障害に合わせたスポーツ」が前回2009年の調査と比べて大きく増加しているということである。もう1点は、これとは対照的に2009年の調査で最もコメント数が多かったスポーツ組織の運営に対する個人レベルの要望が5年を経た2014年では大幅に減少して

いるということである(3. 3節, 表4)。保護者からみた当事者意識ではスポーツに対するニーズとしては単にその機会があるだけ,あるいは余暇レベルということではなく,障害特性を意識しながらその内容や競技性への期待が示されている。知的障害者が行うスポーツが福祉やレクリエーションの延長の域を出始めた,あるいは「知的障害者もスポーツができる」という段階を既に超えてきているといえる。知的障害者スポーツの普及・振興には社会や周囲の意識や態度が影響するが,今後,知的障害者のスポーツを一層推進していくためには,当事者側に新たな段階のスポーツニーズがあることも社会や周囲が積極的に意識していくことが求められる。

指導者・支援スタッフ側の意識や態度もスポーツ要求の変化に即した対応が求められる。今回調査対象とした知的障害者スポーツ組織では指導者・支援スタッフを「コーチ」と称しているが,内山(2013, p.689)はコーチの本質として,「体験知ではなく理論知の实在意義に触れ,既知の体験だけでは競技者を誰も到達したことのない地平へと導くことは不可能」だとしている。社会や周囲の意識に加え,直接的にスポーツ指導に携わるコーチが知的障害者の行うスポーツをどのようにとらえ,位置付けているかは,実際の活動効果や継続性などに大きく影響する。当事者側に「活動内容の充実化」というニーズがあることが確認された以上,経験や勘だけではそのニーズを充足することには限界があり,必然的に知的障害者のスポーツ推進には指導者側のスキル,とくに理論知によるものも関係することになる。たとえボランティア参加のコーチであったとしてもニーズに合った活動内容を支援できる知識,意識,態度,指導力が求められる段階にきているといえる^{注10)}。八十川(1999)はこれまでの知的障害者のスポーツ指導について,「指導者側の指導の観点と知的障害者側の観点が一致していなかった」と述べている。人的資源の養成,マッチングが求められる。

さらに具体的なスポーツ効果,機会や支援スタッフ等への評価・謝意などがカテゴリーを生成している。とくに特別支援学校卒業後の日常生活で障害特性に合ったスポーツ機会の不十分さ,あるいは潜在的なニーズがあるという実態があらため

て示された。その要求は,記録や勝ち負けというよりもスポーツ参加そのものにあるといえる。機会が増え,スポーツが身近で参加しやすいものとなり,それまでみられなかったような率直なニーズが表出してきたものと考えられる。今回調査を行なったスペシャルオリンピックスが,障害程度や競技レベルなどで参加を限定,あるいは排除することなく,広く知的障害者のスポーツ参加を支援してきたことによるもので,同組織が継続的に全国で活動を展開してきた一つの意義だといえる。併せて,スポーツ環境では「移動・送迎」に関するコメントが多くみられサブカテゴリーを生成している。在宅の65歳未満の知的障害者の場合,9割以上が親と暮らし,また,一人で外出できない場合の外出方法として家族の付き添いが8割近くになっている(厚労省,2013)。本人だけでの外出や移動に制約などがある知的障害者特有のニーズであり,今後スポーツの普及・振興のためには解決すべき部分だといえる。今回の調査では十分な参加状況となっているが(3. 1節),保護者による会場までの送迎がある中での結果となっている。在宅で生活している知的障害者のうち保護者等による送迎支援が得られない場合のスポーツ参加は十分でない可能性がある。なお,スポーツ参加に係る費用負担に関するコメントは今回一件もなかった。知的障害者の経済状況,就労状況^{注11)}を考えると異例とも受け取れるが,前提に保護者の関与があるためである。

このような「機会への感謝」や「移動送迎の課題」などは,スポーツ本来の目的や効果,活動内容や競技性などとは直接関係ないものであり,スポーツ実践の前段階にある部分ともいえる。スポーツ参加に理解ある保護者や支援スタッフの存在がスポーツ要求の実現には不可欠だということであり,知的障害者のスポーツ要求の充足が当事者主体のものになりがたい構造であることを暗示している。多木(1995)は「スポーツを問うことは社会を問うこと。社会の方がスポーツに可視化されている。」と述べているが,今回このような結果が示されたということは,社会における知的障害者スポーツのあり方,位置付けを表しているともいえる。今後の普及・振興に向けた課題の一つである。

4. 3 知的障害者のスポーツニーズの到達点と今後の課題

本研究では、知的障害者が学校や福祉施設以外で継続的に行なうスポーツに関して、内容の充実化や向上を求めるニーズがあることを明確にした。知的障害者スポーツは組織化において障害者スポーツの中で遅れて展開^{注12)}した分野ではあるが、継続的なスポーツの機会を得たことでようやくニーズが表出してきたといえる。実践者、支援者だけでなく、研究者までもを含めて、「知的障害者はスポーツができる存在」という段階を越えて、「スポーツらしく充実した活動」を求めているということを認識していかなければならない。

一方で、スポーツらしさを意識した内容の充実化やレベル向上を目指すことに対しては、すでに先行する身体障害者スポーツにおいてその普及とともに新たに生じた課題として指摘がみられる。具体的には、「競技性が高まるとともに参加者が限定的、排除的になっている」、「個々の障害を意識して公平なものにしようとするほどクラスは細分化され、通常の競技として成り立たなくなる（藤田，1999，p.291）」、「重度者の場合は参加が制限される（八十川，1999，p.28）」といったものである。参加が広がる中で、競技性の高まりが参加の広がりや活動を制約するような実際上の問題が生じてきているといえる。そしてこの問題を全体的なスポーツ観、スポーツの在り方の議論として問題提起する方向も打ち出されてきている。「障害者スポーツの「スポーツ」へのメインストーリーミングの圧力からの解放（藤田，1999，p.298）」、「スポーツの価値の転換，価値の序列が入り込まないスポーツはできないだろうか（高橋，1999，p.46）」、「アダプテッドスポーツの思想を取り入れながら，競技スポーツの文脈で語る言葉を私たちは持っていない（渡，2012，p.320）」などである。多くは身体障害者のスポーツ実践，研究によるものではあるが，普及にとまらぬスポーツ理論の問題としての葛藤のような指摘である。

本研究で対象とした知的障害者スポーツ組織は、いまのところ競技指向ではないため多様なニーズに応えながら，知的障害者スポーツの拡大に努めてきた。それは同組織が長年活動を継続してきた大きな意義だといえる。しかし，今回の調査では

当事者側の意識としてスポーツらしさや充実化へのニーズが以前に比べ増していることが明らかとなった。前述のような議論をふまえると，今後，知的障害者スポーツが単にレベルや競技性を追求していくならば参加の限定や排除といった同じような問題に陥ってしまう可能性がある。組織運営や実践現場では，こうした当事者側のスポーツニーズに即した展開が求められ，同時に理論研究においては葛藤として危惧されているものに対する発展的解決の方向性の提起が要請される。

謝辞

本研究はJSPS科研費（基盤C21500611，C24500765）の助成によるものである。また，調査に際しては，公益財団法人スペシャルオリンピックス日本，関連地区組織，および仙台大学の仲野隆士先生，広島経済大学の松本耕二先生，公益財団法人スペシャルオリンピックス日本の渡邊浩美氏に多大なるご協力をいただいた。ここに記して謝意を表する。

〈注〉

- 1) 「障害者スポーツ」という言葉についてはいくつかの捉え方や表現があるが（藤田，2008，p.14；矢部，2010，p.196），本研究の調査においては競技種別や活動水準などを限定することなく，対象とした知的障害者スポーツ組織で行われているスポーツプログラムを対象として回答を得ている。
- 2) 調査対象とした「スペシャルオリンピックス」（本部東京，1994年設立）は，現在は全ての都道府県に活動拠点（地区組織）を置き，知的障害者スポーツの支援を展開している。活動方針として，実践のほとんど全てを無償のボランティアで担っている他，保護者も重要な支え手とされている。本研究では，複数の活動拠点（地区組織）の会員を対象に調査を行っている（渡邊，2006；スペシャルオリンピックス日本編2017）。
- 3) 保護者は親密であるがゆえに，本人の想いをわかりやすい位置におき，同時に，親密な介護等が成人子でありながら扶養義務として課せられている側面もあり，保護者の当事者に対する関係は対等に客観化して相手を見ているとは限らない。しかし，本論が対象とするスポーツ活動は，当事者が活動参加して

いるときは保護者の関与を離れた当事者を応援する位置になる。これらは家庭における暮らしの介護では得難い、そして学校や施設では体験しがたい「保護者と当事者」の活動である。当事者を客観的に見る活動も含んでいるといえる。こうした点から本論では、これらを言い表す用語として「当事者の伴走者としての保護者」「保護者からみた当事者意識」とした。

- 4) 知的障害に関する法的な定義はない。手帳制度については、「療育手帳」が適用され、A(重度)、B(その他)に分けられている。ただ、この手帳制度は身体障害がある人たちを対象とした「身体障害者手帳」のように全国同じものではなく、その名称や等級の分け方等は自治体ごとに異なる場合がある。
- 5) 調査対象とした「スペシャルオリンピックス(本部東京)」の地区組織は、共通の理念、方針、ルールにより活動を行っているが、複数の地区組織を対象とした2009年と2014年の2回の調査では異なる地区組織も含まれており、全ての回答者が同一というわけではない。
- 6) 厳密には本調査に回答した保護者のうち一部で当該スポーツ組織の委員等によりミーティングや事務作業などを役割分担しており、それが参加頻度の回答に影響し知的障害当事者(回答者の子ども)の活動頻度と若干の差異が生じている可能性がある。また、「参加していない」という回答が存在するのは、現在スポーツ活動に参加していない家族であっても会員として継続登録してあれば調査対象として調査票を郵送したためである。本調査の限界でもある。
- 7) スポーツボランティアとは、報酬を目的としないで自分の労力、技術、時間を提供して地域社会や個人、団体のスポーツ推進のために行なう活動のことを意味する。(SSF2006)
- 8) 障害者や高齢者など多様な人たちの特性に合わせた(適合させた)スポーツのことで、ルールや用具などを工夫することにより多くの人たちのスポーツ参加を可能にするものである(矢部ほか, 2004)。
- 9) 具体的には、成人一般では週に3日以上が24.4%、週に1~2日が23.1%、月に1~3日が18.3%となっている。障害者では、週に3日以上が8.5%、週に1~2日が9.7%、月に1~3日が8.9%となっている。
- 10) 本研究と同時にに行った同組織のコーチを対象とした

調査・分析では、知的障害がある会員が参加するスポーツプログラムについて「負荷を求めないもの」と認識していることが明らかとなっており(「日本障がい者スポーツ学会誌」に投稿済み)、当事者のニーズとは合致していない。

- 11) 特別支援学校の高等部卒業後(知的障害)の進路は約64%が社会福祉施設等であり、そのうち就労に関するものの多くが旧授産施設にあたる就労継続支援B型となっている。ここでの平均工賃は平成26年度で月額14,838円となっている(日本発達障害連盟, 2016)。
- 12) 知的障害者の全国的なスポーツ大会「ゆうあいびっく」は1992年から実施されてはいるが、これは身体障害者の全国大会が実施されるようになってから30年近く後になってからのことである。また、各競技団体の組織化や実際のスポーツ活動が活発になってきたのは、1990年代半ば以降のことである(日本障害者スポーツ協会, 2010)。

〈文献〉

- 阿部 潔(2008) スポーツの魅惑とメディアの誘惑。世界思想社。
- 藤田紀昭(1999) スポーツと福祉社会 ~障害者スポーツをめぐる~。井上俊・亀山佳明編, スポーツ文化を学ぶ人のために。世界思想社, pp.283-298。
- 藤田紀昭(2002) 障害者スポーツとメディア。橋本純一編, 現代メディアスポーツ論。世界思想社, pp.197-217。
- 藤田紀昭(2008) 障害者スポーツの世界。角川学芸出版, p.14。
- 後藤邦夫(1992) 障害者スポーツの現状と将来への展望。スポーツ教育学研究, 11, pp.41-48。
- 川喜田二郎(1967) 発想法。中公新書。
- 川喜田二郎(1970) 続・発想法。中公新書。
- 厚生労働省社会・援護局障害保健福祉部(2013) 平成23年生活のしづらさなどに関する調査(全国在宅障害児・者等実態調査)結果。
- 文部科学省(2013) 体力・スポーツに関する世論調査(平成25年1月調査)。文部科学省。
- 守田香奈子・七木田敦(2004) 知的障害児のスポーツ活動への参加を規定する要因に関する調査研究: 保護者への調査を通じたニーズの把握。障害者スポーツ科学, 2(1), pp.70-75。

- 内閣府『障害者白書（平成21年版）』2009.
- 内閣府『障害者白書（平成26年版）』2014.
- 日本発達障害連盟編（2016）発達障害白書2017年版. 明石書店.
- 日本障害者スポーツ協会（2010）障害者スポーツの歴史と現状. 日本障害者スポーツ協会.
- 能村藤一（1998）知的障害者スポーツの現状と課題. 臨床スポーツ医学, 15（2）：149-153.
- 奥田睦子（2007）総合型地域スポーツクラブへの障がい者の参加システム構築のための調査研究：障がい者の参加状況と受け入れ体制の構築に向けたクラブの課題. 金沢大学経済論集, 42, pp.157-185.
- SSF笹川スポーツ財団（2006）スポーツ白書. pp.87-95.
- スペシャルオリンピックス日本（2014）スペシャルオリンピックス日本20年の検証.
- スペシャルオリンピックス日本編（2017）ゼネラルオリエンテーション標準テキスト. スペシャルオリンピックス日本.
- 田引俊和（2018）知的障害者のスポーツニーズと課題の検討～スペシャルオリンピックス参加者の保護者を対象とした調査分析～. 北陸学院大学・北陸学院大学短期大学部研究紀要, (10), pp.78-78.
- 多木浩二（1995）スポーツを考える. ちくま新書, pp.150.
- 高橋豪仁（1999）身体障害者スポーツに関する一考察：ソーシャル・ロール・バリゼーションの視点から. 奈良教育大学紀要人文・社会科学, 48（1）, pp.37-48.
- 内山治樹（2013）コーチの本質. 体育学研究, 58, pp.677-697.
- 魚住廣信（2004）「障害者のスポーツトレーニング理論」矢部京之助・草野勝彦・中田英雄『アダプテッド・スポーツの科学～障害者・高齢者のスポーツ実践のための理論～』市村出版, pp.58-61.
- 渡邊浩美（2006）障害者スポーツの社会的可能性. 21世紀社会デザイン研究（5）, pp.135-144.
- 渡 正（2010）パラリンピックの表象実践と儀礼的関心. 橋本純一編, スポーツ観戦学. 世界思想社, pp.230-251.
- 渡 正（2012）障害者スポーツの臨界点. 新評論.
- 八十川睦子（1999）障害者スポーツの指導の観点に関する一考察：知的障害者のスポーツ指導を中心に. 奈良女子大学スポーツ科学研究, 1, pp.23-33.
- 矢部京之助・佐藤賢（1995）知的障害児のフィットネスとスポーツ. 臨床スポーツ医学, vol.12, No11：1259-1264.
- 矢部京之助・草野勝彦・中田英雄編著（2004）アダプテッド・スポーツの科学. 市村出版：東京.
- 矢部京之助（2010）アダプテッド・スポーツ. 田口貞善ほか編, スポーツサイエンス入門. 丸善, pp.196-206.

